

鬼も幻想郷から来るそ
うですよ？

はくしゃく

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

問題児シリーズの二時創作を書いてみたかった。

だから書いてみた、それだけ。

二時創作ってなんやねん、恥ずか死ぬ

誤字脱字、文脈がおかしい等を見つけた時はご連絡してくださいと嬉しいです

ここや感想返信で言ってることは頭空っぽなので話半分で聞いて下さいね

次回更新：ま、まだだ、まだ慌てるような時間じゃない……

目次

第0話	く幻想郷の鬼く	—	1
第1話	く鬼と異世界の者達く	—	4
第2話	く鬼の嫌いなモノく	—	14

第0話　　幻想郷の鬼

幻想郷。人や妖怪、妖精達がひっそりと暮らすその世界の地下には旧地獄と呼ばれる場所がある。そこにとある一人の鬼がいる。身長は高い。着ている上着は現代で言う所の体操服に似ている、また下は半透明のスカートを履いている。手首には引き千切られた枷の様な物がついていて、きらめく様な長い金髪、赤い目、額から生えた大きく太い一本の赤い角を持つその鬼の名前は星熊勇儀。かつて妖怪の山と呼ばれる場所で四天王だった四人の鬼の内の一人である。勇儀は手に持つ杯、星熊盃を傾けながら酒を飲んだ。最近の勇儀は旧地獄での生活に退屈を感じていた。

幻想郷に入る前は自分を退治しに来る人間と勝負をし、楽しんでいた。それに飽き始めた頃に一人の鬼が幻想郷の噂を聞き幻想郷に入った。

幻想郷に入つてすぐの頃は天狗や河童などの妖怪と宴会をしたり、力比べをしたりしていた。

しかし、何時からか他の妖怪達は自分たち鬼を恐れ、ご機嫌取りばかりをするようになった。そしていつの間にか住んでいた妖怪の山に鬼を頂点とする縦社会が出来た。

鬼に挑んだりする者はいなくなり、勝負事が好きな鬼には退屈な日々が続いた。

その日々の中で一人の鬼がまた噂を聞いた。幻想郷の地下には嫌われ者や荒くれ者が集まる旧地獄という場所がある、と。

そして鬼達は一人また一人とその旧地獄に移住していき、ほぼ全ての鬼が地上から姿を消した。

鬼にとつて力が全ての旧地獄での生活は快適な物であった。だが、その中に居てもなお勇儀との勝負で勝てる者は少なかった。むしろ単純な腕力勝負で勇儀に勝てる者はいなかった。故に勇儀に挑んでくる者はこの旧地獄でも少なかった。最近した戦いも、少し前に旧地獄の対外的な代表をしている者が起こした異変を解決しに来た人間二人との勝負だけだ。久々に勇儀が負けた戦いではあるが、そもそも力比べではなく妖怪と人間が対等に戦えるようにした弾幕ごっこという遊びであったし、勇儀は盃に入れた酒を一滴もこぼさないようにするという特別なルールを自分に課していたからだ。

「はあ、何処かに強い奴はいないかねえ」

勇儀がもう一度星熊盃を傾け酒を飲もうとした時、視界の端に一枚の封書が映った。

「なんだこれ」

勇儀が封書を拾う。封書には達筆でこう書かれていた。“星熊勇儀殿へ”と。勇儀は怪訝な顔をしてから封を切った。そこにはこう書かれていた。

“悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。”

その才能（ギフト）を試すことを望むならば、
己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、
我らの箱庭に來られたし”
それを読み終えた瞬間、勇儀の体は大空へと飛ばされていた。

第1話 鬼と異世界の者達

落下。

勇儀の体は遙か上空から地面に向けてまっすぐに落ちていた。勇儀は特に焦らずに辺りを見渡した。眼前には見た事も無い世界が広がっていた。遠くには断崖絶壁、眼下には巨大な天幕に覆われた大都市、そして自分の周りには同じ状況の人間が三人と三毛猫がいた。その中の一人の人間が叫んだ。

「ど……何処だここの!?!」

そんな叫びの中でも三人と一匹と勇儀は落ちていき、途中の緩衝剤であろう水膜を幾重も通って

「わっ!」

「きゃ!」

「にゃ!」

湖に着水した。三人と勇儀は水膜のおかげで勢いが衰えていたため無傷であった。が、三人の内の誰かのペットであろう三毛猫は溺れていた。ペットを助けるために動いた少女以外はさっさと陸に揚がった。そして人間二人は口々に文句を垂れ始めた。勇

儀はそんな二人の文句を聞き流しながら手に持っていた酒瓶と星熊盃の無事を確認し、盃から零れた分の酒を注ぐ。三毛猫を助けた少女も陸に揚がり、服を絞りながら呟いた。

「此処、どこだろう?」

「さあな。まあ、世界の果てつぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃないか?」

三毛猫少女の呟きに先程、上空にいた時に大声で叫んでいたヘッドホンを着けた少年が服を絞りながら応える。真つ先に服を絞り終えたヘッドホン少年が軽く曲がつくせつばねの髪の毛を掻き上げながらさらに言を続ける。

「まず間違いないだろうが、お前達も変な手紙を読んでここに来たのか?」

その言葉に先程の三毛猫少女ではない方の少女が応える。

「そうだけど、まずは“オマエ”って呼び方を訂正してください。私は久遠飛鳥(くどうあすか)よ。以後は気をつけなさい。それで、そこで猫を抱えている貴女は?」

「春日部耀(かすかべよう)。以下同文」

「そう。よろしくね春日部さん。次に、野蛮で凶暴そうな貴方は?」

「高圧的な自己紹介ありがとよ、お嬢様。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜(さかさまいざよい)だ。粗野で凶悪で快楽主義者の駄目人間だから、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれ」

「そう。取り扱い説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハツ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

「それで、最後に貴女は？そもそも人間なの？」

三者三様な自己紹介を終え、飛鳥のその声で三人が一齐に勇儀の方に目を向ける。勇儀は三人の顔を見ていき、十六夜の前で止める。

「…私は勇儀。鬼の星熊勇儀だ」

十六夜は少し驚いた顔をした後、ニヤつと笑い、勇儀に問う。

「オニ？オニつてあの鬼か？」

「どの鬼かは知らないが、多分その鬼だろうね」

手に持っている星熊盃を傾け酒を飲み、勇儀もニヤつと笑い返す。

「ハハツ、じゃああなたは強いのか？」

「ああ、強いよ。…あんたも人間にしては強そうだ」

「なんなら力比べでもしてみるか？」

「お！いいねえ。鬼は強い奴を見ると力比べをしたくなるんだよ。先攻は譲つてやる。

さあ来な!!」

両腕を広げて十六夜を誘う勇儀。横で見ていた飛鳥は今にも殴り合いを始めそうな雰囲気二人を止める。

「ちよつと、二人とも止めなさい。やり合うなら此処がどこなのかを調べてからにしないか？」

勇儀はチラツと横に居る飛鳥を見る。

「…そうだな。じゃあ十六夜、力比べはまた今度にしようか？」

「随分あつさり引き下がるんだな」

「ふん、ここで無理矢理始めても、その草陰に隠れている奴が止めに入るだろうからね」

「なんだ、気づいていたのか」

「自慢にもならんがな、その嬢ちゃん達も気づいてるだろう？」

「まあ、そうね」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「へえ？面白いなお前ら」

四人の目が草陰の方に向けられる。勇儀以外の三人の目は理不尽な収集を受けたのだから腹いせなのか殺気が籠っていた。少しの間、草がガサガサした後、草陰からウサギ耳を生やした少女が出てきた。

「や、やだなあ、そんな怖い顔をしなくてくださいよ、御四人方？上空4000mから落下の旅、お疲れでしょう？だから休憩がてら穩便にお話を聞いていただけたら私は嬉し

い(で)ざ(い)ますヨ?」

「却下」

「お断りします」

「むしろ、楽しかったぞ」

「あつは、取りつく島も無いですね!後、4000mから落ちてきてそんな感想が出てくるあなた様の頭はおかしいでございますよ?」

バンザイと降参のポーズを取る黒ウサギ。しかし、ふざけている黒ウサギの目はしっかりと四人の事を値踏みしている。そんな黒ウサギの右隣に耀、左隣に十六夜が立ち、

「えい」

「ふん!」

「ふぎや!!??」

黒ウサギの耳を遠慮なく引つ張った。

「ちよ、いた、おま、お待ちを!触るまでならまだしも、いたた、しよ、初対面でいきなり黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういいう見ですか!」

耳を引つ張られていた黒ウサギが途中で二人を引き離し怒鳴る。それに悪びれも無く二人は応える。

「好奇心のなせる技」

「お前の言葉に少しムカついたから」

「自由にも程があります!」

「へえ、それ本物なのかしら?」

先程は見ていただけの飛鳥も興味を持ち、三人が見事な連携で黒ウサギを追いつめていく。黒ウサギは唯一、黒ウサギの素敵耳引き抜き包囲網に参加していない勇儀に泣き声になりながら助けを求めぬ。

「お、おまちください!そ、そこの立派な角をお持ちの方!この御三人様を止めるのを手伝ってください!!」

その叫びを聞いた勇儀は星熊盃に酒を注ごうとして酒瓶の中身が空だと気づいた。勇儀は少し考え

「なあ、黒ウサギ…だったか?助けたら酒…買ってくれるか?」

と、黒ウサギに聞く。

「な?!いた、いたた!う、ううう、わ、わかりました!買つてあげますから!!は、はやく!この問題児様達を」

「よし!今の言葉、忘れるなよ?…よし、お前ら黒ウサギを放せ」

勇儀が三人に言うが引つ張り続ける。それを見た勇儀はまず耀と飛鳥の首根つこを掴んで持ち上げると近くに放り投げる。

「いたっ」

「……っ」

次に未だに黒ウサギの耳を引つ張り続けている十六夜の手首を掴む。

「……」

「……！」

十六夜が手を動かそうとするも勇儀にガツチリと掴まれ微動だにしない。少しの間、静かに見つめ合っていた二人だが先に十六夜が折れた。

「はあ、わかったよ」

「すまないね、これも酒のためだ」

勇儀は、はっはっはと笑うと黒ウサギの方を向いた。

「さあ、さっさとこの世界の説明をしてくれ。そして酒だ」

促された黒ウサギは自分の耳をなでながら、この世界の説明をし始めた。

「ふう、ありがとうございます。では、気を取り直して定例文であります、この黒ウサギめが説明させていただきます」

黒ウサギはビシツと背を伸ばす。

「ようこそ、箱庭の世界へ！我々は御四人様にギフトを与えられた者だけが参加できる
“ギフトゲーム”への参加資格をプレゼントさせていただきますと招待状を送りました」
「ギフトゲーム？」

「YES！ギフトとは様々な修羅神仏、悪魔、精霊、星から与えられた能力のことです。
世界にはそんな力を持った方々が沢山おられます！御四人様もその内の一人です。そし
てその様な力を面白可笑しく使って、楽しく過ごすために作られたステージがギフト
ゲームであり、この箱庭の世界です」

両手を広げ、先程まで引き抜かれそうになって、へによりとしていた耳もピンと伸ば
し、満面の笑みで箱庭をアピールする黒ウサギ。そんな黒ウサギに質問をするために飛
鳥が挙手する。

「まず、初歩的な質問をしていいかしら、貴女の言う我々は貴女を含めた誰かなの？」
「YES！異世界から呼び出されたギフト保持者の皆様には、箱庭で生活するにあたっ
て、“コミュニティ”に属していただきます。当然、召喚されて身寄りのない皆様には
私たちのコミュニティをご案内する次第でなのですよ」

「嫌だね」

「私の上に立つならそれなりの力と勇気を示してもらおう」

「属してもらいます！それにコミュニティに依りますが、私たちのコミュニティには上

下関係という物はなく、あくまで仲間という関係です。そしてギフトゲームの勝者はゲームの主催者が提示した商品をゲットできます」

「…主催者は誰がやるの?」

「主催者に制限はありません。誰にでもできます。暇つぶし、力の誇示など理由も様々です。しかし、主催者によっては命の危険もあるゲームも存在します。が!、そういったゲームの方が見返りは大きいですね。土地や人、便利な道具、新たなギフトを手にするのも夢ではありません。ただし、参加するにはこちらも何かをチップとして用意しなければなりません。簡単に言えば勝った人が総取りできます」

「ふうん、結構俗物ね……チップは何を?」

「それも様々です。金品、土地、人材そして……ギフトを賭けることも可能です」

「そう、ならゲームはどう開くのかしら?」

「コミュニティ間のゲームを除けば、ゲーム内容を決め、期日を決め、参加者が集まれば始められます。商店街でも各お店が小規模ながらゲームを開催していますので、良かったら参加していただくいな。…さて、まだまだ説明しなければならぬ事もありますし、質問したい事もありでしょうけれども、いつまでも立ち話というのも何です、よろしければ私のコミュニティにご案内しますよ?」

黒ウサギが一旦説明するのを止める。静聴していた十六夜がそれを聞いて声を出す。

「待てよ。まだ一番大事な事を聞いていない」

十六夜の真剣な声を聞き、黒ウサギが身構える。

「…なんででしょう?」

黒ウサギの返答から少し時間をあけてから、十六夜は一つの質問をする。

「この世界は……面白いのか?」

その問いに勇儀も耀も飛鳥も黙って黒ウサギの方を向く。

「——YES。ギフトゲームは人を超えたモノのみに許されるゲームです。皆様の元の世界より格段におもしろい、と黒ウサギが保証します」

黒ウサギは四人に見つめられながらも、自信満々といった風に応えた。

第2話 鬼の嫌いなモノ

「ジン坊ちゃん！新しい方々をお連れしましたよー！」

勇儀、飛鳥、耀はコミュニケーションに招待すると言った黒ウサギと共に四半刻ほど歩いていた。ようやく街の門が見えてきた所で一番前を歩いていた黒ウサギが手を振りながら大声で門の近くにいる子供を呼んだ。勇儀はようやく酒が飲めると思いながら、黒ウサギが道中で言っていた門の前でコミュニケーションの現リーダーが待っているという会話を思い出していた。

「お帰り、黒ウサギ。そちらの女性三人が？」

「はいな、こちらの御四人様が……」

クルリ、と振り返った黒ウサギの動きが止まる。

「……え、あれ？もう一人いませんでした？目つきと口と態度の悪い殿方が……」

その問いに飛鳥が応える。

「ああ、十六夜君のこと？彼なら世界の果てを見てくるぜ、とか言って走っていったらよ」

あっちの方と指をさす飛鳥。黒ウサギは呆然とした後、自慢のうさ耳を逆立てながら

飛鳥に詰め寄る。しかし、飛鳥はそれを飄々と受け流す。勇儀はそんな二人のやり取りを尻目に先程黒ウサギが話し掛けた少年に話し掛けた。

「なあ、あんたがリーダーかい？」

「は、はい！一応そうです」

突然、額から一本の赤い角を生やした女性に話し掛けられた少年はどもりながらも応える。勇儀は少年を見ながら空になった酒瓶を見せる。

「この辺で酒を売ってる場所は無いか？黒ウサギが買ってくれて言うからついてきたんだが」

「お、お酒ですか？えっと、それなら歓迎会をしようと思っていたお店にあると思いますよっ。」

少年のその言葉を聞いた勇儀は頬を緩ませて笑顔になる。

「そうか、そうか、そいつは良かった。なら、案内してくれるかい？ああ、私は勇儀、鬼の星熊勇儀だ」

「あ、僕はコミュニケーションのリーダーをしているジン||ラツセルです。年齢十一になったばかりの若輩者ですがよろしく願います。えっと、後ろの方々のお名前は？」

「ああ、黒ウサギに聞いたただされているのが久遠飛鳥、猫を抱えているのが春日部耀だ。後もう一人居るが、そんなことはまあどうでもいい。とっととそのお店に行くよ。酒

だ、酒！」

勇儀はそういうと意気揚々と三人を置いてさっさと門をくぐった。黒ウサギは一刻半で戻ります、と叫びながら十六夜を探しに行き、残ったジン、耀、飛鳥もお互いに軽い自己紹介をした後、勇儀に続いて門をくぐった。

―箱庭二一〇五三八〇外門、内壁―

先に門をくぐった勇儀はどんどんと先を歩いていくが後に続いていた飛鳥、耀はビツクリしたように足を止めた。そして耀が呟く。

「…天幕の中に入ったはずなのに太陽がある」

「はい、箱庭を覆う天幕は中に入ると不可視になるんですよ。そもそもあの巨大な天幕は太陽の光を直接受けられない種族のために設置された物ですから」

耀の呟きに応えたジンの言葉を聞き、飛鳥が空を見上げ皮肉そうに言う。

「それは気になる話ね。まるで日の光が苦手な…吸血鬼がいるみたいない方ね……いや鬼が居たんですもの居ても可笑しくないわね」

「はい、吸血鬼も住んでいますよ」

なんとも複雑そうな顔をする飛鳥。少し遠くから勇儀が声を出す。

「おーい、ジン！店ってどこだー？」

「あ、今行きまーす！」

―六本傷の旗を掲げるカフェー

勇儀、ジン、飛鳥、耀の四人は街の一角にあるカフェテラスに座った。するとすぐに猫耳の少女が店の奥から出てきた。

「いらっしやいませー。ご注文はどうしますか？」

猫耳少女の問いに勇儀がすぐさま応える。

「取りあえず酒をあるだけ頼むよ」

「はーい、お酒をあるだ…え？」

注文を復唱しようとした猫耳少女は驚き、ジンが慌てて訂正する。

「ちよ、ちよつと待つてください！さすがにそれはお金が足りません」

「そうかい、じゃあ二升頼むよ」

勇儀はジンの言葉を聞きすぐに注文する量を減らす。ジンは財布の中身を確認して苦しそうな顔をする。しかし、ここでさらに洩ると勇儀の機嫌を損ないかねないと考えたジンは大丈夫か？と目で聞いてくる猫耳少女に、大丈夫だと頷く。猫耳少女はすぐに笑顔になって注文の確認をする。

「はーい、お酒二升ですね、日本酒でよろしいですか？」

「ああ」

店員とジンのやり取りがもろに視界に入っていた飛鳥と耀は遠慮がちに紅茶と軽食を頼んだ。勇儀の隣に座っている飛鳥が呆れた様に勇儀に言う。

「昼間からよく飲むわね」

「二升なんてたかが知れてるよ」

しばらくして先程の猫耳少女がお酒と軽食の乗ったトレイを持って戻ってきた。

「お待たせしましたー。日本酒二升とティーセット三つでございます」

「おー待ってたよ」

勇儀はお酒を受け取るとすぐに星熊盃に注ぎ一気に飲む。

「……ゴクゴク、ぷっはあ。……いやあ三十分ぶりの酒はうまいねえー」

そんな勇儀の満面の笑みを横目で見ながら飛鳥は、はあ……とため息をつきジン、耀に話し掛ける。三人が話しているのを見ながら勇儀はひたすら酒を飲み続ける。三人は何やら自分達の持つギフトの事で盛り上がっていた。そして、この店に来てから少し時間が経った。勇儀は早々に一升を飲みほしており、残り一升になった酒をゆっくり味わっていた。すると、四人の座る席に身長が2メートルを超える一人のピチピチタキシードを着た男が来た。

「おんやあ？誰かと思えば東区画最底辺コミュのリーダーのジン君じゃないですかあ

「？」

かけられた声とやってきた男の姿を見たジンがあからさまに嫌な顔をした。

「これはこれはフォレス・ガロのガルドⅡガスパー。今日は何の用ですか？」

「いんやあ？聞けば新たな人材を呼び寄せたらしいじゃないか。そこで、この私がコミュニティの誇りである名も旗も奪われても、まだ！未練がましく過去に縋り付くガキの犠牲者を増やさないためにこうやって足を運んだんですよ」

ガルドと呼ばれたピチピチタキシードが四人の座るテーブルの空席に腰を下ろす。そんなガルドに耀と飛鳥は愛想笑い向ける。勇儀は気にせず酒を飲む。

「失礼ですけど、同席を求めらるならまず氏名を名乗った後に一言添えるのが礼儀ではないかしら？」

「おっと、失礼。私は箱庭上層に陣取るコミュニティ、六百六十六の獣の参加である」「烏合の衆の」「コミュニティのリーダーをしている、って待てやゴラア!!誰が烏合の衆だ！」

ジンが入れた横やりにガルドが怒鳴りその顔が狼の様に変わっていく。そして腕を伸ばしてジンに掴み掛かろうとする。黙って酒を飲んでいた勇儀が嬉しそうな顔をして声を出す。

「お？喧嘩か？」

勇儀の声にハッ、と我に返ったガルドが失礼。と言つて再び席に座り直す。それを見た勇儀はつまらなそうにまた酒を飲みだした。ガルドは努めて冷静を装いながら

「口を慎めよ、小僧。紳士の俺でも聞き逃せねえ言葉はあるからな」

「森の守護者であつた貴方になら相応の礼儀で返していましたが、今の貴方はこの付近を荒らす獣でしかありません」

「ハッ、そういう貴様は過去に縋り付く亡霊と変わりないだろうがよお？お前のコミュニケーションがどういふ状況か理解してんのか？」

「はい、ストツプ」

ジンとガルドのやり取りを聞いていた飛鳥が止めに入る。

「二人の仲が悪いのはわかつたから。…ねえ、ジン君、一つ質問していいかしら。ガルドさんが指摘している私たちのコミュニケーションの状況つていふのを説明してくれるかしら？」

「そ、それは…」

飛鳥の質問にガルドと勢いよく言い争つていたジンは言い辛そうに閉口する。そんなジンの様子を見て飛鳥は怪訝な顔をしながらも、さらに言を続ける。

「貴方はコミュニケーションのリーダーなのでしよう？なら、同士として呼び出した私たちにコミュニケーションがどういふ物なのかを説明する義務があると思うのだけれど、違ふかしら

「？」

飛鳥の声はいたって静かである。けれども、ジンは苦しそうに俯く。それを見ていたガルドは顔を狼から人の物に変え、含みのある笑みと上品ぶつた声で飛鳥に話し掛ける。

「貴女の言う通りですよ、レデイ。新たに呼んだ方々に箱庭のルールを説明するのはコミュニティのリーダーとして当然のこと。その話もせずにコミュニティの勧誘をするなど、言語道断です。レデイ達はその説明を受けていないのなら私が代わりに説明いたしますが？」

飛鳥はガルドの言葉を聞き、一度ジンの方を見る。しかし、ジンは俯いて黙り込んだままだったので、仕方なしといった風にガルドに説明するよう促す。

「承りました。…まず、コミュニティとは読んで字のごとく複数名で作られる組織のことです。そして、コミュニティはそれぞれ名と旗印の二つを持っています。それらはこの箱庭世界で活動するにあたり自分がどの誰か、つまりは自分の身分証として使われる物です。その二つの中でも旗、特にこれはコミュニティの縄張りを主張するためのものでもあります。この店にも大きな旗が掲げられているでしょう？」

ガルドが店の一角を指した。そこには「六本傷」が描かれた旗が揺らめいている。

「もし、自分のコミュニティを大きくしたいのなら、あの旗印のコミュニティに両者合意

でギフトゲームを仕掛ければ良いのです。私のコミュニティもそうして大きくしていただきますからね」

ガルドが自分の胸元に入っている虎をモチーフにした紋様の刺繍を指差す。耀と飛鳥が辺りを見回すと、この店以外のほとんどがガルドの刺繍と同じ旗を掲げていた。

「そう。なら、この周辺のほとんどはあなたのコミュニティが支配しているのね」

「ええ。残す所は本拠のコミュニティが遠い場所にあるか、箱庭上層にあるか……奪うにも値しない名も無きコミュニティのみです」

ガルドはジンを見ながら嫌らしい笑みを浮かべる。ジンは未だに俯いたままで、ローブの端を握りしめている。勇儀はガルドと飛鳥のやり取りと、その間のジンの様子をつまらなそうに黙って見ていた。耀も同様に会話に入るつもりは無いのか静観していた。ガルドがジンから目を離し、再び飛鳥の方を向いた。

「さて、私のコミュニティは置いておきましょう。ここからはジン君とレイ達が入ろうとしているコミュニティのことです。ジン君のコミュニティは数年前までは、この東区間最大のコミュニティでした。それはもう人間の立ち上げたコミュニティでは過去最高と言われて、箱庭上層でも知られるほどでした。まあリーダーは別人でしたけどね。しかし、そんなコミュニティは敵に回してはいけない存在に目を付けられてしまつた。そして、彼らはその存在にギフトゲームを挑まれて……一夜にして壊滅した。この

箱庭にて最悪の存在、魔王によって」

ガルドは舞台上で演技をするかのごとく、声音を変えながら話す。

「魔王とは、主催者権限…ギフトゲームを挑まれば絶対にそれを受けなければいけない、という権力を振り回す者達の総称です。…彼らはその魔王との戦いに破れました。そしてコミュニティは名も旗も主力陣も、全てを失いました。…そこで終わっていればその人間が作ったコミュニティは、未来永劫、最高のコミュニティとして語り継がれるはずだったのです。そう！そこで終わっていれば…しかしそこにいるガキはそうせず、過去の栄光に縋り付いた。結果、そのコミュニティは今や、名も無きコミュニティとしてしか数えられなくなった」

「なるほどね。そのコミュニティの復興のための新たな人材として私たちが呼ばれたら訳ね」

「おそらくそうでしょうね。しかし、考えても見てください。名も旗も失った…身分証の無いコミュニティに何ができるでしょう？それに名と旗は身分証の役割だけではありません。名誉や誇り、魂といったモノを込めて作られる象徴みたいなモノです。それを守れもしないコミュニティに誰が集まろうというのでしょうか？…彼は出来もしない目標を掲げ、僅かな生き残りである黒ウサギや子供達に無理を強いているだけです。実際にリーダーとしての活動も十分にしていませんし、コミュニティの経営なども全て黒

ウサギに任せている」

長い説明の後、ある程度のコミュニケーションの現状を聞いた飛鳥は、これ以上はまたジンへの侮辱が続くだけだろうと判断し声を出す。

「それで？ ガルドさんは私たちに随分丁寧に説明してくれるけれども、どうしてかしら？」

飛鳥がガルドに問う。ガルドは笑顔で応える。

「単刀直入に言います。もしよろしければ、黒ウサギ共々私のコミュニケーションに来ませんか？」

その答えに俯いていたジンが慌てて叫ぶ。

「な、何を言い出すんですか!？」

しかしガルドは冷やかな目でジンを睨みつけながら言う。

「黙れ、ジン。ラッセル。今回の勧誘、テメエはどういう風にした？ 異世界のレイディ達を自分勝手に呼び出しておきながら、理由や現状を話さずに自分のコミュニケーションに入れようとした」

「そ、それは…」

「何も知らない相手なら騙せると思ったか？ あほが」

ジンを睨みつける目がより一層に鋭くなる。ジンはその視線と飛鳥達への後ろめた

さから、もう一度俯いてしまった。

「…で、どうすされますかレディ達？あ、今すぐに決めるなどとは言いません。箱庭には召還されてより三十日間ほどのコミュニティにも属さなくても良いという自由期間がありますからね。なんなら、一度見学されますか？ジンのコミュニティ“ノーネーム”と私のコミュニティ“フォレス・ガロ”を」

「いえ、結構よ」

「は？」

飛鳥の拒絶の答えにガルドだけでなく、ジンも一緒になつて驚く。

「だから結構よ。私はジン君のコミュニティに入ろうと思つているもの」

飛鳥は何事もなかったように耀に質問する。

「春日部さんはどうするの？」

「私は、どっちでも。この世界には友達を作りに来ただけなもの」

「そうなの。なら私が友達一号に立候補しようかしら？」

「…うん。いいよ」

飛鳥と耀は二人で微笑み合い、次に勇儀に全く同じ質問をする。

「星熊さんはどうするの？」

勇儀は残り少なくなった酒瓶を置いて飛鳥の方を向く。

「私か？今はジンのコミュニティに入るつもりはないねえ」

勇儀の答えに飛鳥と耀の答えに安心していたジンはショックを受ける。飛鳥がそう、と言つてさらに問う。

「まあ、人それぞれですものね。けれど理由を聞かせてもらつてもいいかしら？」

「ん？ジンは私を騙そうとした、それだけさ。……鬼は嘘と卑怯者が大嫌いなんだ」

飛鳥、耀、ジン、ガルドは勇儀がそう言うのと同時に辺りの空気が急激に重くなつたように感じた。そしてその体は石になつたように動かなくなつた。だが、それも一瞬のことです。勇儀はフツと笑つて、でも、と続ける。

「この世界に呼んでくれた礼と、この酒代分ぐらひは働いてやるさ」

勇儀は終わりだと言わんばかりに酒瓶の残りを一気にあおつた。ガルドはそんな勇儀に語りかける。

「な、ならば、私のコミュニティはどうでしょうか？私のコミュニティには嘘つきはいませんよ？」

ガルドの勧誘に興味が無いといった風に勇儀は答える。

「私は弱い奴にも興味はないよ」

「な……」

ガルドは面と向かつて弱いと言われ、その身を怒りに震わせる。が、声を荒げたりせ

ずに必死に自称紳士としての言葉を探していた。

「お、お言葉ですがレデ」

「黙りなさい」

尚も言葉が続けようとしたガルドは、しかし飛鳥の発した言葉により勢い良く口を閉じた。ガルドは驚いて目を見開き、口を開けようとするが全く開かない。

「…!?…」

「うん？これが飛鳥の力かい？」

「ええ、そうよ。簡単に言えば格下の相手に命令することが出来る能力よ」

「ふーん。そりやすごいね」

ガルドの話と酒を飲みきったことにより勇儀の機嫌はそれほど良くなく返事は素っ気ない。が、飛鳥は気にした様子はなくガルドの方を向く。

「さて、ガルドさん？貴方にはもつと色々聞きたいことがあるの。だから、その椅子に座って私の質問に答え続けなさい」

飛鳥に命令されたガルドは今度は椅子に勢いよく座る。その時に大きな音がしたので店の奥から先程の猫耳少女が慌てた様子で出て来た。状況を確認した猫耳少女は急いで仲裁に入ろうとする。

「お、お客様！店内での揉め事は困ります！」

「ちようどいいわ、あなたにも面白いモノを見せて上げる」

「？」

小首を傾げる少女を確認した飛鳥はジンと猫耳少女に質問する。

「ねえジン君と店員さん。私思ったのだけれど、この世界では自分達の誇りであるコミユニティの旗を易々とゲームのチップにするものなのかしら？」

「い、いえ。追い詰められた時などでは別ですが、それはかなりのレアケースです。何しろ負ければコミユニティの存続は絶望的ですから」

今一、話の流れが読めていない店員である猫耳少女も取りあえずジンの言葉に同意とばかりに首を縦に振る。

「まあそれはそうよね。そんな大勝負を強制出来ることこそが、魔王が魔王たる所以なのですものね。なら、魔王でないあなたが、その強制する権限を持たないあなたが、なぜそんな大勝負を仕掛け続けることが出来たのか、教えてくださる？」

その言葉にガルドは悲鳴を上げそうな顔になるが、その口は飛鳥の質問に答えるために開かれる。

「方法は簡単だ。相手のコミユニティの女子供を攫って脅迫すること。そこに動じない所は後回しにして他を取り込んでから圧迫していった」

「…あなた程度が思いつくことなんて、そんなところでしょうね。では、取り込んだコ

「コミュニティはどうやって従わしていたのかしら？」

「各コミュニティから人質を数人取ってある」

「そう。それで、その人質は何処に幽閉しているのかしら？」

「もう殺した」

瞬間、ドゴオン！と大砲を撃ったような爆音が響いた。勇儀がガルドを殴った音である。元々機嫌が悪くなりかけていた勇儀がガルドの言葉を聞いて、我慢出来なくなつたのだ。ガルドは店の壁を破壊して外へと殴り飛ばされた。勇儀はさらに追い打ちをかけるべく、今しがた出来たデカイ穴から外に出た。それを呆然と見ていた飛鳥であったが、このままでは自分達が悪役になりかねないので急いで勇儀の後を追う。外に出ると勇儀がガルドをまさに殴らんとする所だったので飛鳥が待ったをかける。

「ちよつと待ちなさい！星熊さん！」

「なんだい、飛鳥。まさか止めようってんじやないだろうね」

勇儀の目が飛鳥をチラリと見る。飛鳥はその目に一瞬たじろぐもしつかりとした口調で返す。

「そのまさかよ。とは言っても私も相当ムカついているわ。だから、そのの卑怯者を許しはしない。でも、そのまま殴ると私達が悪者になってしまうわ、複数人で弱者を取り囲んでいるんですもの」

勇儀は飛鳥の言葉を聞き、今の自分の状態を見る。…確かに。

「なら、どうするんだい」

飛鳥はいたずらっ子っぽい顔をしながら答える。

「その卑怯者とギフトゲームをするの。フォレス・ガロの存続と、私達ノーネームの誇りをかけた、ね」

勇儀はそれを聞き、なるほどと笑顔を浮かべる。見る人が恐れるような獰猛な笑みを。